
とある紅魔館執事の記録

Malfunction

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある紅魔館執事の記録

【Nコード】

N0960BA

【作者名】

Malfunction

【あらすじ】

ある日唐突に幻想入りしたオリ主。彼は偶然運良く紅魔館の主、レミリア・スカーレットに拾われ、紅魔館の執事として生きていくことになった。そんな彼が遭遇した、ちょっとした策謀のお話。

Neogni I (前書き)

はじめまして。

初投稿 + 初執筆です。

駄文とは思いますが、生暖かく見守っていただければと思います。

N e g r o n i I

I . N e g r o n i I

「ふう……結構疲れるな……」

この赤い、いや、朱い……ちょっと違うな、紅い洋館にたどり着いてからはや一週間。親切な当主に拾われて、雇われてからはや一週間。僕は未だに掃除に慣れずに居た。

そもそも、だ。この屋敷には電気が通っていない。いや、この屋敷に限らずこの幻想郷と言われる現代社会から隔離された妖と、忘れ去られたものの領域には電気が存在しない。

それはつまりどういう事かというところ、掃除機が無いってことで、と言うよりもありとあらゆる文明の利器が無いか、あるいは稀少なため、外の世界での掃除とは違って結構時間がかかるし体力も居る。

掃除を簡単にするための方法は今練習中で、使ったら逆に大惨事を巻き起こしてしまうために使うわけにもいかず、つまりは僕は水からの手と足と、あと原始的な道具を少々使ってこの外観からは似合わないほどに広い洋館を隅から隅まで掃除しているってわけ。

「この廊下はこれで良いかな……」

一応、僕の見立てでは、結構綺麗になったはずだ。もっとも、上司となったメイド長の十六夜咲夜さんに言わせると、まだまだ甘い、と言った評定をくだされるのだろうけど。

「そうね……いいわ、合格。次はメイド妖精の待機部屋よ」

と思ったそばからどこからとも無く現れて、指示を出して消えていく。正しく神出鬼没で、人間とは思えない。

どうして僕がこんな洋館にたどり着いて、しかもそのまま居着くことになってしまったのか。それにはちょっとした訳がある。

あれは何時もどおりに帰省を終えた日だった。

何時もどおりに地元の空港から羽田まで飛行機で飛ぶ。そして何時もどおりに上位クラスのゆったりとしたリクライニングチェアに座り、何時もどおりに飛行を満喫していた。

空の旅なんて代物は、僕にとってはあまりにもありふれていて、あまりにも日常的すぎて、特に危機感を抱くわけでもなく、航空事故が起きたら起きたで、いや、航空事故に当たるぐらいなら宝くじに当たって欲しいと思いつつ、暇つぶしに買った本を読んでいた。

平穏な空旅で終わるはずだった。窓の外を見るまでは。

特に何かを思うわけでもなく、ただ小説を読むことに少し飽きたから視線を外に動かしたのだった。上は蒼穹、下は大雲海と大海原。それ以外に見えるものはない。はずだった。

遠くに黒点が見えた。いや、黒点というには大きすぎた。近づいてきているソレは、すぐに輪郭が判るほどになった。小型機だった。いや、もっとありふれた言い方をするのなら、戦闘機、と分類さ

れる機体だった。

妙な機動をしていた。具体的に言うならば、軽くロールしながら
ふらふらと飛んでいた。

アクロバットの練習かな？ と思ったのが第一印象だった。だが
違った。ソレが明らかに異常に接近することに気付いた時、僕は
気付いたら叫んでいた。

機長も気付いたらしい、機体が急激にロールする。

だが、無駄だった。無駄に過ぎた。無駄なあがきだった。

超音速で突っ込んできた戦闘機は、綺麗に旅客機の腹をえぐった
ようだった。ようだった、というのは下から衝撃が届いたからだっ
た。

ソレよりも不味いことがあった。どこからか飛んできた破片が見
事に僕を椅子へと縫いつけていた。

人生ここまでか。やり直したいな、違う、やり残したことって無
いかな、と思いつつも意識が遠のいていく。

青翠色の、明らかに体に悪そうな粒子が視界を輪舞しているのを
見たのを最後に、僕は意識を手放した。

さようなら、人生。

そのはずだった。

ここはどこだろう。

左手には緑豊かな森、右手には霧の立ち込める湖、目の前には紅い洋館、後ろには富士山よりも高そうな山。

はてさて、僕はどうしてこんな所に迷い込んでしまったんだろうか。目の前の洋館にとりあえず訪ねるべきだろうか、それとも死んだはずの我が身が、右胸はたしかに破片に貫かれたのに元通りになつてすることにパニックするべきだろうか。もしかしてあの飛行機はシエオゴラスの悪趣味な暇つぶしだったんだだろうか。流石にそれはないか。

「とりあえず、目の前の洋館が一番まともそうだよなあ……」

誰も好き好んで自ら遭難しそうな山とか森に入ることはないだろう。目の前に人が住んでいそうな屋敷があるなら特に。

「しかし悪趣味だ……」

なんとたつて紅、赤、朱である。洋館それ自体も、ソレを囲む城塞のような塀も。流石に地面と堀を満たす水までは紅くはなかったが。

「だがどこだろう、ここは」

こんな紅に染まった洋館があるなら流石に知りたくなくても勝手にテレビが紹介するだろうに聞いたことがない。まさか現世ではないのだろうか。いや、死にしまった時点でソレは殆ど確定みたいなものだけだ。

幸いにして門番らしき方が居た。

「すみません……」

無視された。

「あの、すみませんっ」

無視された……

「あの、聞いてますか？」

また無視だよ。うん、こうなることは知ってた。

仕方ない。ちょっと揺さぶってみよう。

「すみませんっ」

揺さぶりつつ聞いてみる。大きな胸がたゆんたゆんと揺れるのを至福の感情で見守る。

「……………はっ……………寝てませんよ、咲夜さん」

「咲夜さん？」

「え、あ……………お客様ですか？」

「あ……………いえ、ちょっと違っと思えます」

「？」

首をかしげられても困る。

「気付いたらそこに倒れてたんですが、ここがどこか聞こうと思いまして」

そう告げると彼女は厄介事、と一瞬表情に載せて、すぐに笑みを浮かべて言い放った。

「それなら私からでは少し説明が難しいので……ちょっと待っていて下さい」

「はい」

少し待つとさっきのチャイナ服の門番さんがメイド服の人を連れて戻ってきた。

「んー。害意は感じないわね。いいでしょう、紅魔館は客としてあなたを歓迎します」

「え、あ、はい。よろしくおねがいします」

N e g r o n i I (後書き)

最後までお読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960ba/>

とある紅魔館執事の記録

2012年1月2日04時50分発行